

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ポリネシアとアメリカ大陸：先史時代の文化接触

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 印東, 道子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008358

ポリネシアとアメリカ大陸

先史時代の文化接触

印東道子 (国立民族学博物館教授)

スペイン人バルボアが、ヨーロッパ人として初めて太平洋(「南の海」と命名)を見たのは、1513年であった。それからわずか6年後、マゼランは南米大陸の南端を通過して未知の海へと船を進めた。太平洋がこれほど広いとは夢にも思わず、香料の豊富な東南アジアの島々へ簡単に行き着けると信じていたのだ。しかし、いくら船を西に進めても水や食糧を補給できる島影すら見えず、飢えに苦しみながらグアム島に到達するまでに、3ヶ月以上もかかった。マゼランのとった航路がもう少し西か南にそれていたら、人が住む島を多く「発見」できたかもしれない。というのも、マゼランより数千年も前に太平洋を西から東へと横断した人類の子孫が、当時、多くの島々で生活を続けていたからである。

本稿では、このオセアニア(太平洋)の人々が、いつごろ太平洋の島々に住み始め、アメリカ大陸にまで到達した可能性はあるのかなど、ポリネシアとアメリカ大陸間の文化接触という古くからのテーマについて、最近の研究成果を紹介する。

オセアニアを東進した農耕民

地球上で、人類が比較的最近になって住み着いたのが、オセアニアの島々であ

る。今から3~4000年前ごろに、東南アジア島嶼部をあとにしたオーストロネシア語を話す集団(オーストロネシアン)が、広いオセアニアのほとんどの島に拡散した主人公である。オーストロネシアンが残したもっとも古い足跡は、ニューギニア北東沖の島嶼部のいくつかから見つかり、その年代は今から約3200年前ごろである。遺跡からはラピタ(写真1)と呼ばれる繊細な紋様土器をはじめ、石器や貝製装身具、カメやサカナ、家畜(イヌ、ブタ、ニワトリ)の骨など、豊富な遺物が見つかり、根栽農耕や漁撈を生業とする新石器集団であったことがわかっている(当時のニューギニアやオーストラリアには、数万年前から旧石器文化集団が生活していたが、本稿ではふれない)。

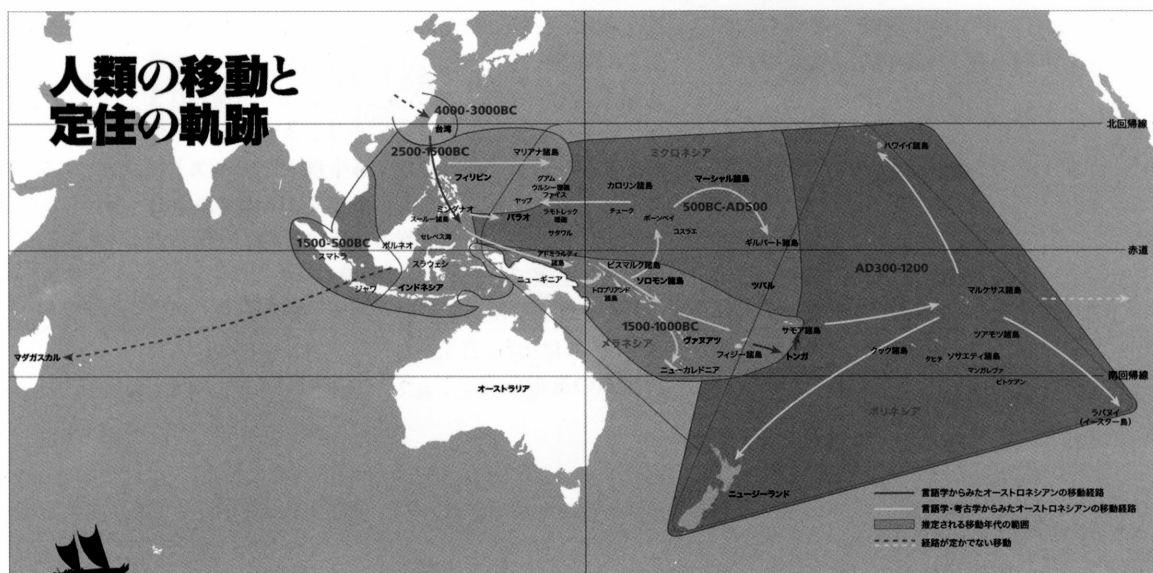
その後、南東のソロモン諸島からフィジー、そしてポリネシアの西端に位置するトンガとサモアまで、次々に島を発見しながら居住域を東に広げていった。わずか数百年で4000kmもの距離を進んだことになる(地図)。この移動は、海流や風向きに逆らって航海しなくてはならなかったため、帆付きのカヌーや卓越した航海術が使われたことがわかる。

サモアに到達した後、再び東に拡散移動をはじめるとして1000年間かかった。その間に、ラピタ土器などの土器文化は

失われ、石斧の形態も変化するなど、後のポリネシア文化複合となる原型が形成された。ここからさらにオセアニアの東部へと拡散するには、それまでよりも距離の長い航海をしなければならず、大型カヌー(双胴船)の建造技術や航海術などがさらに発達した。

東ポリネシアでもっとも古い遺跡はマルケサスで見つかり(AD300~600)、北のハワイ(AD700)、南東のイースター島(AD800~1200)、南西のニュージーランド(AD1200)へと、かなり離れた島々へも果敢に拡散していった。ここに記した主な島々への拡散年代は、近年の研究によって1990年代はじめまで定説のように使われてきたものが見直された数値である。貝殻や骨から得た年代値には最新の補正値を求め、明らかに人間居住以前の資料を除去するなど、それまでオセアニア全域から報告された年代測定値が一定の基準で検討された。その結果、ニュージーランドは400年以上、イースター島などは400~800年も新しい年代に訂正された。これらは、森林破壊の開始やネズミの出現時期などさまざまなデータともおおむね一致している。

ポリネシアの陸上動物相は貧弱で、新しい島で居住を始めた人間は、鳥や貝、魚などを手当たり次第に消費し、生物相



オセアニアの地図とオーストロネシアンの拡散経路(『オセアニア:海の人類大移動』昭和堂より)

や環境を破壊していった。遺跡から発掘される鳥骨の研究からは、ポリネシアのほとんどの島では人間が居住開始して数百年の間に、在来種の90%にあたる陸鳥が絶滅したり、その島に棲息しなくなったことが指摘された。ニュージーランドの絶滅した巨鳥モアなどはその典型例である。イースター島でも、島をおおっていた樹木類が激減し、有名なモアイ像が製作を中止された原因になったと考えられるなど、枚挙にいとまがない。このようにオセアニアの考古学研究は、人間が新しい環境で生活をはじめた際に行った資源の乱獲や、自然破壊の様子を明らかにしてきた。しかし他方で、森林を切り開いて栽培活動を充実させた結果、王族が統率する階層社会が発展し、初期ヨーロッパ人をして「南海の楽園」と言わしめた豊かな社会が育まれたのも事実であった。本稿では環境破壊と文明の興亡の関係を紹介する余裕がないため、J. ダイアモンドの『文明の滅亡』などをお読みいただくこととし、先を続けよう。

ポリネシア人はアメリカ大陸へ行ったか？

広いポリネシア内に点在する島々のほとんどを見つけ出したポリネシア人が、優れた航海者であったことは明らかで、アメリカ大陸まで航海するのに充分可能な技術をもっていた。東南アジアからポリネシア東端まで、14000kmも移動した背景に、どんなモチベーションがあったのかを明らかにするのは難しいが、新しい

島を発見して土地や資源を占有する魅力は大きかったであろう。そして、イースター島など、ポリネシアの辺境に位置する島々に到達したポリネシア人の中に、さらに東へ向かって新しい島を発見しようと航海したものがいたとしてもおかしくない。というより、いなかったと思う方が不自然である。

実際に、ポリネシアとアメリカ大陸との間の接触を示す動植物がいくつか存在するので、最近の研究結果を以下に紹介していこう。

1) サツマイモ

アメリカ大陸原産のサツマイモが、初期ヨーロッパ人の来島時にポリネシアの主要な島々で栽培されていたことは、広く知られてきた(写真2)。さらに発掘調査の結果、サツマイモの炭化遺存体がクック諸島のマンガイア島(AD1000~1100)やニュージーランド(AD1150~1250)から出土し、ポリネシア人がヨーロッパ人よりも早くサツマイモを知っていた動かしがたい証拠となっている。問題は、サツマイモがどのようにして海を渡り、広いポリネシアに拡散したかである。

サツマイモが人の手を介さずに伝わった可能性として、水に浮く種子が海上を漂ってポリネシアまで流れ着いた場合や、鳥によって運ばれた場合、そしてサツマイモをのせた南米の舟が漂着した場合などが検討されてきた。しかし、そのような導入では、花を咲かせることは出来ても、人間が植え付けなければ増殖しない種類

であることが早くから指摘されてきたため、上記の可能性はほとんどないと考えられる。その上、サツマイモを示すポリネシア語がエクアドルやペルーと同じ「クマラ」であることは、単に植物のみが新たにポリネシア文化に入り込んだのではなく、植物と言語がセットとして入ったことを示しており、人間を介して導入されたことは疑いようもない。

では、だれがサツマイモを運んだのであろうか？ 遺伝形質、言語、航海術などを総合的に判断すると、ポリネシア人がアメリカ大陸に到達して持ち帰った可能性が最も高く、年代的にはAD1000年前後であろう。このころには、ペルーの海岸地域ではまだサツマイモが栽培されていなかったので無理があった。しかし、AD1000~1100年ごろの導入であれば、ペルー北海岸でもサツマイモが栽培されていたので、その可能性は高い。最初に持ち込まれたと推定されるポリネシアの島はイースター島だけに限定できず、マンガレヴァからイースター島を結ぶ楕円形内の島々で、そこからハワイやニュージーランドに広まっていった。サツマイモ栽培がまたたく間にポリネシアの主要な島々へ広まった背景には、主食であるヤムイモと栽培法がほぼ同じで、冷涼な気候にも強かったため、ポリネシア文化にすんなりと受け入れられたようである。

2) ヒョウタン

ポリネシアの中央および東部の島々では、AD1200年までにはヒョウタンが栽培



写真1 BC900年ごろのラピタ土器(ニューカレドニア出土)

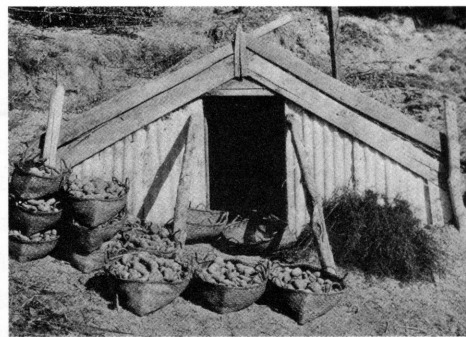


写真2 ニュージーランドで栽培されたサツマイモと保存用小屋(Best1976より)

されていたため、サツマイモと共に南米から持ち帰られたと考えられてきた。ヒョウタンはアメリカでは約1万年前にさかのぼる長い栽培の歴史をもっているからである。ところが、最近行われた植物遺伝学の研究によれば、アメリカ大陸から出土したヒョウタンは形態的には原産地アメリカと同種であるが、遺伝的にはアジア起源であることがわかった。おそらく太平洋を渡ったものではなく、北回りでかなり古い時代に渡ったのであろう。

ポリネシアのヒョウタンに関しても同様の研究が行われ、葉緑体にはアジアの亜種の遺伝型が認められたが、遺伝子核のマーカにはアメリカの亜種の混入も認められた。両大陸の品種がポリネシア内で混交した結果であることを示している。これによって、ポリネシアのヒョウタンはアメリカ大陸から入った歴史をもつことが明らかになったが、人間が持ち運んだのかどうかについては不明である。言語的にはアメリカとの関係が見られない上、ヒョウタンは224日間も水に浮いた後でも発芽能力があるため、人間が持ち帰った可能性はあまり高くないかもしれない。

3) ニワトリ

南米のニワトリの起源については不明の部分が多かったが、2007年にニュージーランドの研究者らによって発表された遺伝学研究成果はセンセーショナルなものだった。チリのアラウコ半島南にある El Arenal-1 遺跡から出土したニワトリ骨(AD 1304-1424)のDNA塩基配列の特徴が、西ポリネシアのトンガとサモアから出土し



写真3 アフ・ヴィナブの石組み(イースター島)

たニワトリ骨(1500~2000年前)のそれと一致したのである。これによって、東南アジアからオセアニアへと連れ運ばれたニワトリが、さらに南米大陸まで運ばれたことも明らかになったという発表である。

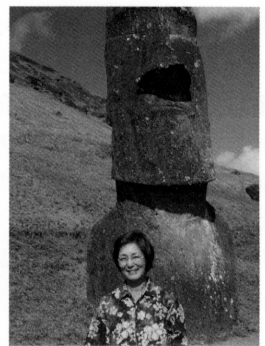
ところが、この論文に対する反論がオーストラリアの研究者グループから提起された。それによると、上記の論文では、使用したミトコンドリアDNAの塩基配列の範囲が限られていたこと、特徴的なものとされたその配列はヨーロッパなど他のニワトリにも見出されること、El Arenal-1 遺跡出土骨の年代値には補正法に問題があり、コロンブス以前の骨である確実性は低いこと、などが問題点としてあげられた。その上で、新たにヨーロッパ人以前からチリで飼われていたと言われる現生ニワトリ(アロウカナ種)のDNA分析を行い、世界のニワトリのDNA資料と比較している。その結果、アロウカナ種のDNAは多様性を示し、アジアからヨーロッパに広く分布する型もあれば、中国からインドネシアのニワトリや家禽の祖と考えられる赤色野鶏と同型であるものも示された。

チリのニワトリがポリネシア経由で持ち込まれたと確定するのは難しくなったが、読み方によっては、アロウカナ種がこれまで言われてきたような純血種ではなく、ヨーロッパ人が持ち込んだニワトリと混血した過去をもつことが明らかになったのであり、ポリネシア起源のニワトリを否定することにはならない。また、イースター島から出土したニワトリ骨(AD1270-1400とAD1304-1424)のDNAがフィリピンの赤色野鶏のものと同じだったことも紹介されており、今後は、確実にコロンブス以前の年代をもつニワトリ骨の分析が必要になるであろう。

南米からポリネシアへ?

最後に、南米から人間がポリネシアへやってきた可能性はあるのだろうか?ハイ

エルダールのポリネシア人南米起源説は完璧に否定されているが、ごく少数の人が(ポリネシア人と共に?)海を渡った可能性は否定し切れない。特に、イースター島のアフと呼ばれる石組み基壇の中で、南部のアフ・ヴィナブ(写真3)に残されたものは、非常に精巧に切り出した石がかっちりと組み合わせられている。石組みを使った神殿の構造にはあまり共通点はないが(関雄二氏ご教示)、石の切り方や組み方の技術そのものは、イースター島の他のアフに較べて格段に優れた技術が使われており、インカの石組みの精巧さにつながる印象が強い。アンデス文化に詳しい読者の方々は、写真を見てどのように思われるだろうか。



イースター島のラノララクに残された未完成のモアイの前で(2007.1)

印東道子(いんとう・みちこ)

国立民族学博物館教授。Ph.D.(ニュージーランド・オタゴ大学)。専門はオセアニア考古学・民族学。1973年以来、ミクロネシアを中心にオセアニアの島嶼環境で発掘調査を続けている。著書に『オセアニア 暮らしの考古学』(朝日選書)、編著書に『環境と資源利用の人類学:西太平洋諸島の人と文化』(明石書店)、『ミクロネシアを知るための58章』(明石書店)、『イモとヒト』(平凡社)(堀田、吉田と共編)など